

令和3年度第3回 京都市市民参加推進フォーラム 摘録

■開催日時：令和3年12月24日（金） 午後1時～午後3時

■開催場所：京都市役所本庁舎4階 正庁の間

■議題：

- (1) 各部会による議論
 - ・第2回 市民参加の裾野拡大検討部会
 - ・第2回「市民参加推進力」指標検討部会
- (2) 令和3年度第2回市民公募委員サロンの開催について

■報告事項：

- (1) 令和2年度みんなごとのまちづくり推進事業の取組結果
- (2) 新たに設置された附属機関等に係る協議結果及び市民参加に関係する新しい事業等

■公開・非公開の別：公開

■出席者：市民参加推進フォーラム委員12名

荒木委員，安委員，乾副座長，岩崎委員，内田座長，金田委員，木村委員，嶋倉委員，菅谷委員，並木委員，村田委員，森川副座長

■傍聴者：なし

■特記事項：

動画共有サイトYouTube（ユーチューブ）を利用し，後日，音声配信を実施する。
Zoomを用いたWeb会議形式で開催した。

【議事内容】

1 開会

2 座長挨拶

（内田座長から一言あいさつ）

（議題の説明，資料確認，時間配分について説明）

<内田座長>

- ・ それでは，部会に分かれての議論を進める。部会に分かれたら，森川部会長，乾部会長に，以後の進行をお願いします。

3 議題

議題（1）各部会による議論

第2回市民参加の裾野拡大部会

<森川部会長>

- ・ それでは、部会において議論を進めたい。事務局から資料の説明をお願いする。

<事務局>

（資料1「第2回市民参加の裾野拡大部会資料」説明）

<森川部会長>

- ・ 事務局からの説明を受けて、高校での取組の課題を共有し、行政がどのように動けば良いか、市民側が取り組めることがあるか、また市民参加推進フォーラムとしてどのような支援ができるかを検討したい。
- ・ 私自身は、紫野高校のヒアリングに同行した。英語教育に特色があり、周辺地域のフィールドワークはあるが、地域課題に関する授業・取組は少ない印象を受けた。ヒアリングした先生は、教員や保護者以外の大人と接する機会を増やしたいと仰っていた。

<安委員>

- ・ 堀川高校のヒアリングに同行した。探究に特色があり、自分のテーマを深めていく。個々でテーマを設定する際の間口を広げるため、様々な課題を伝えることが良い方法ではないかと思った。

<菅谷委員>

- ・ 大学生であれば、自身の研究のために地域に入っていくが、高校生は保護者や教員を介さないと地域に入っていけないように思う。そのような高校生をどのように地域につなぐかという課題がある。高校周辺の地域との関わりと、行政の関わりが必要ではないか。

<森川部会長>

- ・ 部会資料には、地域・社会課題に対する課題解決の提案にとどまっていることが課題として記載されているが、行動化することが標準となることを求めることが本当に良いことなのかと感じる。

<菅谷委員>

- ・ すべての生徒が行動に移すとは考えられない。その中の数パーセントの生徒がきっかけを得て行動に移してくれれば成功だと思う。

<森川部会長>

- ・ 菅谷委員の地域（六原学区）では、高校生とつながったことはあるか。

<菅谷委員>

- ・ 高校からの依頼を受けて、地域の取組の説明をするために授業に行ったことがある。ただし、かなり離れた地域の高校であった。現在は、その活動は止まっていると思われる。

<安委員>

- ・ その原因は何か。

<菅谷委員>

- ・ 学校側の意識や、先生の異動等で地域とつながる取組が頓挫してしまうことが多い。今後、一定して取り組むのであれば、教員の人脈だけではなく継続する約束事のようなものを作って回していく必要があると思う。

<嶋倉委員>

- ・ ヒアリングは高校の教員に実施しているが、高校生が地域連携の取組に関してどのように思っているかが重要だと思う。「市民参加」として授業で取り組むと、難しく捉えてしまうため、お祭りへの参加等、無意識に参加したことが実は市民参加だったと後から伝える方が、生徒自身の面白いアイデアを壊さない可能性もある。

<村田委員>

- ・ 高校の授業は教員の引率が必要になることと、授業が1コマ50分であるため、大学の授業と連携するのが難しい。市立高校が京都市と一番連携が取りやすいのであれば、京都市の課題や今後の考え方を話すだけでも、高校生にとって身近に感じると思う。授業内であれば、ケーススタディだけでなく京都市の課題を話すプログラムが現実的である。
- ・ 課外活動での取組の参考として、グローバルセンターでは三菱みらい育成財団の助成を受けて、手上げ式で「Glocal Shift Programme」を実施している。高校生から20名程度の申込みがあり、チームで半年間オンライン等で課題解決提案をするプログラムである。この取組は今後も続くため、一度話を聞いたり、テーマの1つとして京都市の課題を入れてもらっても良いかもしれない。
- ・ また、龍谷大学で学生気候会議を実施している。こちらも手上げ方式で、ほぼ全学部・全学年から希望があり、対面で実施した。講義とディスカッションの構成で実施したが、温暖化について興味を持ってもらえた。京都市として高校生版を実施しても良いのではないか。

<森川部会長>

- ・ 令和4年度から始まる「公共」の授業はどのようなものか。

<事務局>

- ・ 現在の指導要領の「現代社会」に代わる科目である。課題に対してよりアクティブに学ぶと聞いている。主体的な学び方に変わるイメージである。

<安委員>

- ・ これまでの科目から名称が変わるだけでなく、自分で考えて行動する思考力を育てるような学びが増えれば良いと思う。ディスカッションなど、自分の考えを自分の言葉で説明することの一步となってほしい。

<菅谷委員>

- ・ 「公共」というと、主権者教育として権利と義務の「権利」の部分を学ぶイメージがあるが、「義務」の部分もセットで学んでほしいと思う。

<森川部会長>

- ・ 「公共」の授業の中で、生徒が関わる高校周辺の地域社会・自治組織について学ぶ機会が必要になる。高校生の子どもに選挙で投票する人の選び方・投票の仕方を聞かれて困ったことがあり、実際の選挙の際に、それらを学校で学ぶ機会があれば良いと思う。
- ・ 京都市の市民参加の考え方としては、主権者教育は市政参加、地域活動への参加はまちづくり活動につながる部分だと思う。この構造の中で、フォーラムとして高校生の市民参加の課題をどう捉えるかである。

<菅谷委員>

- ・ 高校生に限らず、自分に関わる課題があることとセットになると思う。何も課題がなければ、考えないしアクションも起こさない。市民参加のきっかけとして、学校で学んだ課題を自分に関わる問題と置き換えて学ぶことが必要である。

<森川部会長>

- ・ そういう意味で言うと、市政参加とまちづくり活動の2つの要素はつながっている。市民参加のきっかけはどちらの入り口からでも可能である。

<菅谷委員>

- ・ 高校生にとってつながりやすいチャンネルが増える。

<森川部会長>

- ・ 高校生とだけではなく、授業を実施する教員とのつながりやすさも必要である。地域団体と連携するにも、組織と組織の連携は難しく、現状は組織の中の人と人のつながりに頼りがちである。そのため人事異動で取組が途切れてしまう。組織同士を高いクオリティでマッチングできる人材が必要である。

<安委員>

- ・ マッチングという意味では、意識の高い教員がおられるところでは、見えていないだけで行政を介さずに既に行われている可能性もある。

<菅谷委員>

- ・ モデル授業を1つの高校が受けてくれて、自走できるようになれば、継続的な関係性になっていくと思う。

<安委員>

- ・ 先ほど、市の職員が授業に説明に行くという話があったが、市職員だけではなくお宝バンクに登録している団体が取組について話に行く仕組みがあっても良いのではないかな。

<森川部会長>

- ・ 外部との連携において、高校側からの依頼を受けるのは教育委員会の学校指導課になるのか。

<事務局>

- ・ 市立高校が全市的に共通で取り組む必要がある内容については、学校指導課が窓口となるが、それ以外は各高校単位で依頼されている。

<内田座長>

- ・ 市民活動総合センターには市内の高校からの相談はないが、研修旅行で京都に来る他府県の高校から依頼があり、市民活動をする団体に話を聞けるようコーディネートすることは多い。

<村田委員>

- ・ 高校生は研修旅行や遠足等、まとまった時間がないと取組が難しい。だからこそ1時間だけでも授業の枠をもらうなど実施事例を作りリスト化できれば、広がる可能性はある。まずは、教員にも知ってもらうことが大事。

<嶋倉委員>

- ・ 今は、高校が依頼することばかり考えているが、逆に高校生に取組を話したい団体を募るのはどうか。

<菅谷委員>

- ・ 先生のニーズに合うかどうかである。

<村田委員>

- ・ そのためにも1つ目の実施例として、京都市の取組を話す授業をやってみる必要がある。

<事務局>

- ・ 担当の所管する業務で、行政の取組をお話する「市政出前トーク」や、約420団体の登録がある「お宝バンク」の制度があるので、高校にご紹介することは可能である。

<森川部会長>

- ・ 高校に行って話す授業の団体募集があれば、京都景観フォーラムは手を挙げたいと思う。

<村田委員>

- ・ 高校の先生方に周知する機会はあるのか。

<事務局>

- ・ 市立高校の校長会・教頭会でご説明する機会はある。今回のヒアリングで、各高校に行き直接説明することで、より理解して連携してもらえるような印象を持った。

<菅谷委員>

- ・ システムチックなマッチングではなく、千載一遇の出会いからである。

<安委員>

- ・ 出会った団体の活動に興味を持ち、入っていきけると良い。

<菅谷委員>

- ・ 50人に説明して、1人興味を持ってもらえるかという割合である。

<安委員>

- ・ 割合としては、十分だと思う。

<森川副座長>

- ・ 教員の負担を減らすため、外部の連携先をどう見つけやすくしてあげられるかという取組の方向性か。

<菅谷委員>

- ・ 教員がパッと見てわかるコンテンツのメニューを作成するのはどうか。

<村田委員>

- ・ メニュー作成も必要だが、可能であれば、フォーラム委員が個別に各高校に出向き、授業で利用できる京都市のコンテンツを教員に具体的に説明しないと始まらないと思う。

<菅谷委員>

- ・ 実際に協力してもらえそうな高校にお願いしてみる必要がある。その情報集めが必要か。

<内田座長>

- ・ 昨年度、市民参加推進計画策定に係るパブリック・コメントに協力いただいたのは、どの学校でどのようなつながりだったのか。

<事務局>

- ・ 同志社中学校である。担当教員と個人的な知り合いであったことから実現した。

<森川副座長>

- ・ やはり教員と団体等の担当者の個々の信頼関係は必要にはなる。モデル授業をやることはできそうだが、個々の信頼関係に基づいたクオリティの高い取組をどのように広めていくか課題を感じる。他に高校への支援のアイデアはあるか。

<菅谷委員>

- ・ 地域貢献・社会貢献を目指す企業は多いと思う。高校の授業とタイアップできれば、より身近になるのではないか。

<安委員>

- ・ 大学進学よりも就職を目指す高校であれば、就職してからも地域貢献を考えてもらう目的で授業をするきっかけにならないか。

<森川部会長>

- ・ 企業と高校とのマッチング機能を果たすのは、京都中小企業家同友会やSILKになるか。

<内田座長>

- ・ 京都中小企業家同友会は熱心に取り組まれているのをよく聞く。

<事務局>

- ・ 民間同士の取組であれば、依頼がなければ行政が介入することはないが、当担当としては、民間のプログラムも含めて市民協働に関する取組にはアンテナを高く持っていたい。

<森川部会長>

- ・ 次回が今年度最後の部会となり、本日の部会を受けてどのような取組や仕組み作りができるかを具体的に決めていきたい。各自その情報集めをしていただき、フォーラムとしてどのような関わりができそうであるかということをご提案いただきたい。

<事務局>

- ・ 現時点で、フォーラムとして関わっていただけそうな部分はあるか。

<菅谷委員>

- ・ 各委員の人脈が広いので、具体的な取組が決まれば団体等を紹介することができる。

<森川副座長>

- ・ 高校から依頼があった場合、委員の所属する団体が授業に出向くことも可能。

<村田委員>

- ・ 高校側からの依頼は、市民協働推進担当か学校指導課のいずれに連絡があるのか。

<事務局>

- ・ 今回のヒアリングで、何か地域連携の取組に関するご相談があれば、市民協働に連絡してもらおうよう伝えている。

<森川副座長>

- ・ それでは、本日の部会は以上とする。

第2回「市民参加推進力」指標検討部会

<乾部会長>

- ・ それでは、部会において、議論を進めたい。まずは、並木委員からソーシャルインパクト評価について説明をお願いします。

<並木委員>

- ・ (ソーシャルインパクト評価について説明。資料 2-1 第3期京都市市民参加推進計画におけるインパクト評価の導入検討資料(並木委員提供資料))

<乾部会長>

- ・ ロジックモデルを具体的な事例を出して分かりやすく説明いただいた。因果関係を明確にしながら情報を整理していくことで、精神論、感情論の話にならずに解決策を見つけていける。構造的な部分をとらえつつ、冷静で、客観的な議論ができる。

<木村委員>

- ・ アウトカムについて、短期、中期、長期のアウトカムに分けるところは新しいと感じた。

例示された生理の貧困のロジックモデルは、本当にロジックが通っているのかどうか分かりづらい。たくさん取組が合わさることで学生のウェルビーイングにつながると思われるので、一つの取組を評価するなかで、これだけでは足りないとなるかもしれない。

<並木委員>

- ・ ロジックモデルを作成し、実践していく中で、ロジックが繋がらないことに気づけたり、足りないものがわかったりする。ロジックが繋がっているかどうかは、定期的に確認していく必要がある。

<乾部会長>

- ・ 中長期的に計画を推進すると、多く取組がそこには含まれるので、長期的なアウトカムとのつながりも見えてくるかもしれない。また、市民参加推進計画の中では、将来のありたい姿を示しているため、それが長期的なアウトカムとなる。その理想と現実とのギャップを埋めていくことが必要である。ロジックモデルを作るということは、ギャッ

プを埋めるための仮説を立てることである。

<並木委員>

- ・ 生理の貧困のところでは、既に課題が明確になっていて誰が関わるのかが分かっているなかでロジックモデルを作成した。実際は、課題が何なのか、誰が関係しているのか整理できていないところからロジックモデルを作成することが多い。その際は、実際に活動している方が何を狙っているのかや、その活動によってどう対象となる市民、事象が変化したのかといったところを聞きながら、ロジックモデルを作っていく必要がある。

<金田委員>

- ・ ロジックモデル作成方法に加えて、測定方法も重要である。生理の貧困でいうと、健康意識の高まりをどのように測っていくのか。市民参加推進力も何で評価するのか考えていきたい。測定方法について、何かお考えはあるか？

<並木委員>

- ・ 一般的にアウトカムを測るときに用いるのは、既存の指標を使うこと。今回の生理の貧困の例だと、毎年、大学側で学生の意識調査を行っていたら、それを測定のために使う。それだけで捉えられない部分は、アンケートやモニター調査を行うこともある。高度なものになると、定点カメラや体にセンサーをつけることもある。その場合、費用がかなりかさんでいく。どこまで行うのか、バランスが大事になる。

<乾部会長>

- ・ 既存の測定数値などを活用することができると良い。

<荒木委員>

- ・ ソーシャルインパクト評価を実施するときは、当事者の賛同のもと、当事者が関わりながら、評価を実施していくのが一般的であると考えているが、いかがか？

<並木委員>

- ・ 当事者の話をどれほど聞けるのかは、市民参加推進計画を評価することの難しさにつながる。通常だと、インパクト評価はひとつの事業を測るときに使う。その場合、当事者も明確なので、ロジックモデルを一緒に作ることとなる。今回は、関係者や対象が幅広い市の計画を回ろうとしているので、難しさはある。施策を客観的に評価していくなかで、参加者の声から良い事例を発見していくために使うことも想定される。今年だけですべてできないが、作成する過程で当事者の話も聞けると良い。

<乾部会長>

- ・ 京都市の掲げる理想像があり、それを実現するために各施策がある。それをすべて測定するのは、予算的に厳しいので、特徴的なものをピックアップするなり、何年かおきに測定することが考えられる。

<岩崎委員>

- ・ ロジックモデルを作成することで、定性的な図り方だけでなく、定量的な測り方ができるようになる。取組の全体像も見えるので良いのではないか。

<木村委員>

- ・ ロジックモデルがあることによって、ロジックのあいまいさに気づくことができる。議論の土台ができると理解をした。つくられたものが最終型ではなく、最初のたたき台であることはわかった。

<並木委員>

- ・ 1年目に作ったロジックモデルが全く機能せず、2年目に大きく変えた経験がある。想定していた関係者が全く違うということに気づくまで1年かかった。ロジックモデルは変わる前提で、取組を進めていくことが大事である。

<乾部会長>

- ・ 失敗も良いメッセージである。どこで失敗したのかを理解する上でも、ロジックモデルは重要である。

<事務局>

(資料 2-1 第3期京都市市民参加推進計画におけるインパクト評価の導入検討資料(並木委員提供資料) 資料 2-2 第2回「市民参加推進力」指標検討部会資料説明)

<岩崎委員>

- ・ 市民参加推進力は誰が使うものなのか。

<乾部会長>

- ・ 京都市に関わる全ての人が使うものである。市民参加に関わる全員が当事者であると思う。誰か特定の方を評価するわけではなく。京都市全体の市民参加の健康診断のようなもの。

<岩崎委員>

- ・ この市民参加推進力を獲得したというのはどういう状況なのか。

<乾部会長>

- ・ 13施策それぞれにアウトカムが記載されているので、この施策を進めていくことで、目指すべき状態に近づくとともに、力を獲得したと言い換えられる。

<並木委員>

- ・ 市民参加推進力はどこに誰が向かっているのか。市民力だと市民を評価しているように見えてしまう。3つの力の表現を考えるにあたって、市民も行政も、市政参加やまちづくりを進めていく状態をどうやったら生み出せるのかという問題意識から出発した。市民参加推進力はあくまで、3つの力をまとめるために置かれている。その3つの力がついてきた、その3つの力をつけるための取組が増えてきたということを実感したり、検証したりできる表現となるようにした。

<荒木委員>

- ・ 政策評価のためか、健康診断のためなのか。健康診断の方がおもしろいと思う。市民を対象にする場合は、押し付けになる懸念があったので、そうならない今の考え方に賛成である。

<乾部会長>

- ・ フォーラムは政策評価を行う第三者委員会ではないので、我々も当事者として評価に含まれる。健康診断的に、数値として良くなったところや、悪くなったところが見られると良い。

<金田委員>

- ・ まちの育成力という記載について、まちの何が育つのか色々な捉え方がある。言葉自体が結構幅広いので、説明に工夫が必要かもしれない。

<荒木委員>

- ・ 非営利セクターの活動では、課題解決と価値創造とがある。火事がおきて消しにいく活動（課題解決）なのか、火事のない地域コミュニティを作ろうという活動（価値創造）なのか。課題という言葉が、3つ中2つに入っていなくても良いと感じた。まちづくりは、ボランティアな活動なので、課題にフォーカスしすぎなくてもよい。

<乾部会長>

- ・ ロジックモデルが価値創造の場合に、馴染むのか。

<並木委員>

- ・ まちの育成力に関しては、元々、まちの主体育成力としていた。言葉として「主体育成」に馴染みがなく、まちの育成力とした。意図していたことは、市民、行政、京都に通う人も含めて、まちづくりに関わる主体となる人を育成するための力である。
- ・ 価値創造は、図で描くとすると掛け算で表現することとなるので、ロジックモデルで表現するのは難しい。ただ、マイナスをプラスにする、マイナスをゼロにする話だけでなく、プラスをプラスにしていく視点も入った言葉があれば良い。

<荒木委員>

- ・ 「まちの課題共感力」を「まちの共感力」としてもいいのでは。課題解決につながる取組も含めて、幅広く評価できるようになる。

<木村委員>

- ・ 重視する視点から3つの力を出しているのが良い。「まちの」ではなく、市民による、市民のための、市民の活動とすると「市民の」という書き方にしても良いのではないか。アウトカムで短期、中期、長期という視点があったが、計画の中で、はじめる、つながる、ひろがるという言葉があるので、その流れを組み込んではどうか。

<乾部会長>

- ・ 「市民の」とすると、行政が入らないことを考えて、「まちの」という言葉にしているのではないか。

<並木委員>

- ・ 計画の中の施策の文言は主語が行政となっている。推進力の表現にもこれを適用すると目線が上から過ぎると考えた。行政が施策を推進することも大事だが、市民がその力の獲得を目指していくという両方の要素を入れるために「まちの」とした。

また、落とし込めるかどうかは分からないが、短期・中期・長期アウトカムの話をす

る中で、はじめる、つながる、ひろがるというフェーズで可視化して整理するのはいいかもしれない。

<乾部会長>

- ・ 市民参加推進力の活用方法について、大学生や団体をサポートするとあったが、行政の中の各部署でロジックモデルを立てるための支援は実施するのか。例えば、市民参加推進力の各施策のロジックモデルを学べる市民も行政も参加できるワークショップを実施するなど。ロジックモデラーを増やしていきたい。

<並木委員>

- ・ 行政がロジックモデル思考になっていくのは良い。市民参加推進力を切り口に行政の各部署にどのようにしてロジックモデルの考え方を広げていくかを考えた。今回フォーラムで作成する各施策のロジックモデルの指標は、各部署が実施している市民参加に関する事業を測るために使われるので、必然的にロジックモデルの考え方が他の部署に組み込まれていくこととなる。良かった事例をロジックモデルとして、お渡しすることで、参考材料として提供していく。

<乾部会長>

- ・ ロジックモデルを作るのは、誰がやるのか、誰が評価するのか。並木委員にすべて任せるわけにはいかないなので、事務局も含めて、まずは委員がやれるようになるところから広げていく。そういった輪を広げていくこと自体が、市民参加推進力の向上につながる。

<並木委員>

- ・ 私が作成した資料は、あくまでたたき台なので、昨年度の計画策定の議論も踏まえてより良いものにしていきたい。

議題（２）令和３年度第２回市民公募委員サロンの開催について

<事務局>

（資料３「令和３年度第１回市民公募委員サロンだより」

資料４「令和３年度第２回市民公募委員サロンへのご招待」説明）

- ・ 前回に引き続き、市民参加推進フォーラムの公募委員からの体験、感想の共有をきっかけに、サロン参加者から審議会へ参加した感想や課題感等を引き出したいと考えている。

<内田座長>

- ・ 市民公募委員サロンの進行についてご意見はあるか。
→特になし。
- ・ 年末年始を挟んで、コロナの状況がどうなるか分からないが、委員の皆様にもできる限り対面でご参加いただきたい。また、各テーブルに分かれてグループワークをする際には、ファシリテーターの役割をお願いします。

4 報告事項

報告事項（1）

<事務局>

（資料5「令和2年度“みんなごと”のまちづくり推進事業の取組結果」報告）

<内田座長>

- ・ 報告に対するご質問・感想等はあるか。
→特になし。
- ・ また、参考に登録団体の情報をホームページでご覧いただきたい。

報告事項（2）

<事務局>

（資料6「新たに設置された附属機関等に係る協議結果（一覧）」、資料7「市民参加に係る新しい事業や取組」報告）

<内田座長>

- ・ 以上で本日の議題，報告事項は終了となる。皆さん，ありがとうございました。

5 閉会

<事務局>

- ・ 本日も長時間に渡ってありがとうございました。2つの部会で活発にご議論いただき良かったと思っております。来年もよろしくお願いいたします。

以上